

# 世界の海を守る

地球上の約7割を占めている海は、世界をつなぐ「道」。その安全・安心を担うのが海上保安官だ。JICAは日本の海上保安庁との連携の下、開発途上国の「海猿」たちと広大な海を舞台に取り組みを進めている。

編集協力：竹田いさみ 獨協大学外国語学部教授

## 私たちの生活に欠かせない海を守る警察官

地球儀をぐるりと回すと、その大半は、青い海で覆われている。海は世界の国々をつなぐ「道」であり、私たちの生活とも密接につながっている。島国である日本にとって、海とのかかわりはさらに深い。陸地面積は世界で61番目だが、海岸線は約3万5000キロメートル。世界第6位の長さを誇る。言うまでもなく、私たちの暮らしは広大な海に支えられ、貿易や漁業、エネルギー開発を通じて、さまざまな「恵み」を得ている。

しかし、そこには大自然ならではの脅威もある。潮の流れや波の動きは、人の手でコントロールできるものではない。ある日突然、天候の急変などにより、命の危険にさらされることもある。さらには、船舶の衝突事故や海洋汚染から、密輸や密航、海賊などの犯罪行為まで、海の上ではさまざまなドラマが繰り返されている。

こういった問題に対処すべく、日々奔走しているのが海上保安官、いわゆる「海の警察官」だ。映画『海猿』でその存在を知った人も多いに違いない。彼らが所属する海上保安庁は1948年の発足以来、全国11カ所に管区機関を設置し、日本の領海の警備、海難救助、海上犯罪の取り締まりなど、日本の「生命線」でもある海を守り続けている。

## 国際協力を通じて日本の貿易ルートを確保

しかし、私たちが守るべきなのは、日本を囲む海だけではない。資源の多くを海外に依存している日本。原油の9割以上はインド洋を経由して、タンカーで運ばれてくる。「海洋国家である日本にとって、海上交通路（シーレーン）の安全の確保は、国の経済の生命線です」と話すのは、海上保安庁の政策アドバイザーを務める獨協大学の竹田いさみ教授。例えば、日本の貿易ルートの一つとして知られるマラッカ・シンガポール海峡は、ヨーロッパ、中東、アフリカに行くための重要な「道」。この海峡で何らかの事故や事件が発生してしまったら、私たちの生活にどれだけの影響が及ぶだろうか。

そこで日本は、1960年代後半から官民連携でマラッカ・シンガポール海峡の沿岸国を中心に支援を開始。水路の測量や海図の作成、灯台や浮標など航路標識の整備、巡視船の供与などを進めた結果、周辺海域の安全性は格段に向上した。

しかしこの数年は、ソマリア沖・アデン湾での海賊行為が国際問題に。2011年、全世界の海賊行為発生件数は439件。うち、このエリアが半数以上を占めている。

日本をはじめ国際社会が連携して海賊対策を押し進め、民間商船の自衛が

### 海上保安庁の専門性を生かした国際協力

JICA国際協力客員専門員  
(元JICA専門家・海上保安庁OB)

石間 聡孝さん

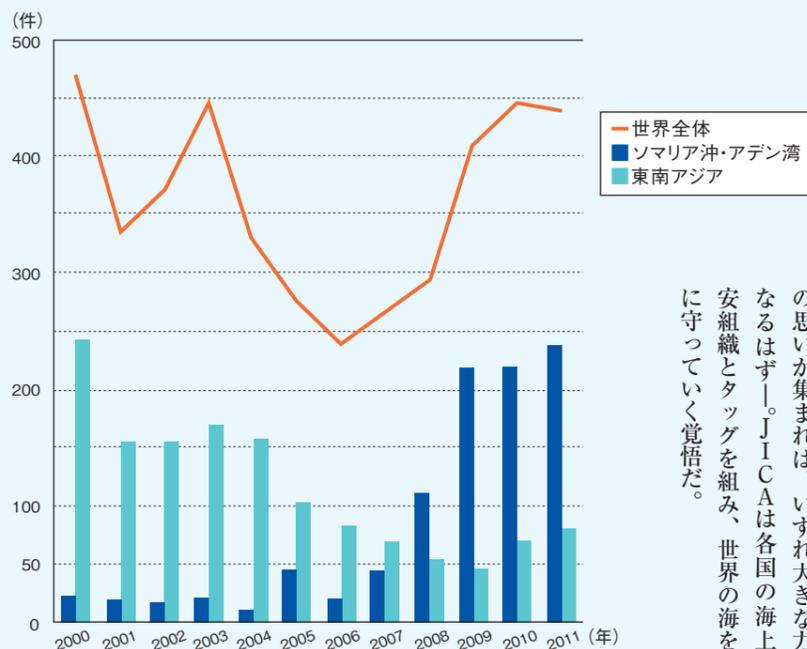


海上保安庁が国際協力を開始したのは1960年代後半。中東から石油を大量に輸入していた日本は、マラッカ・シンガポール海峡を商船の重要な航路として位置付けていました。そこで日本船舶が事故を起こしたら、海域全体に多大な汚染を広げることになる。そのような事態を避けるために、沿岸のシンガポール、マレーシア、インドネシアと連携し、水路測量や航路標識の整備など船舶航行の安全を確保するための協力を始めたのです。

私はJICA専門家として、90年代からフィリピンへの技術協力にかかわってきました。80年代後半に同国の海域で大きなフェリーの事故が相次ぎ、フィリピン政府からJICAに要請があったのです。現地での私の役割は、いわば、両国の海上保安組織をつなぐ「コーディネーター」。フィリピン側の要望を聞き、日本の海上保安庁の部署と連絡を取って、どこでどのような研修が受けられるのか、どういった専門家がいるのかなどの調整を行ってきました。どの国においても、海上保安組織は個人の技量もさることながら、「一つのチーム」としてのまとまりが大きな成果につながります。言葉や文化の壁はありますが、そこは同じ海上保安官。時間を共にしているうちに、「海を守りたい」という気持ちは同じなのだと感じます。

国際協力は日本の海上保安庁にとっても、海上保安の原点に戻る良い機会。日本の若い海上保安官にも諸外国との交流の機会を増やし、海の安全を守るために多くのことを学んでほしいと思っています。

### 海賊行為の発生件数

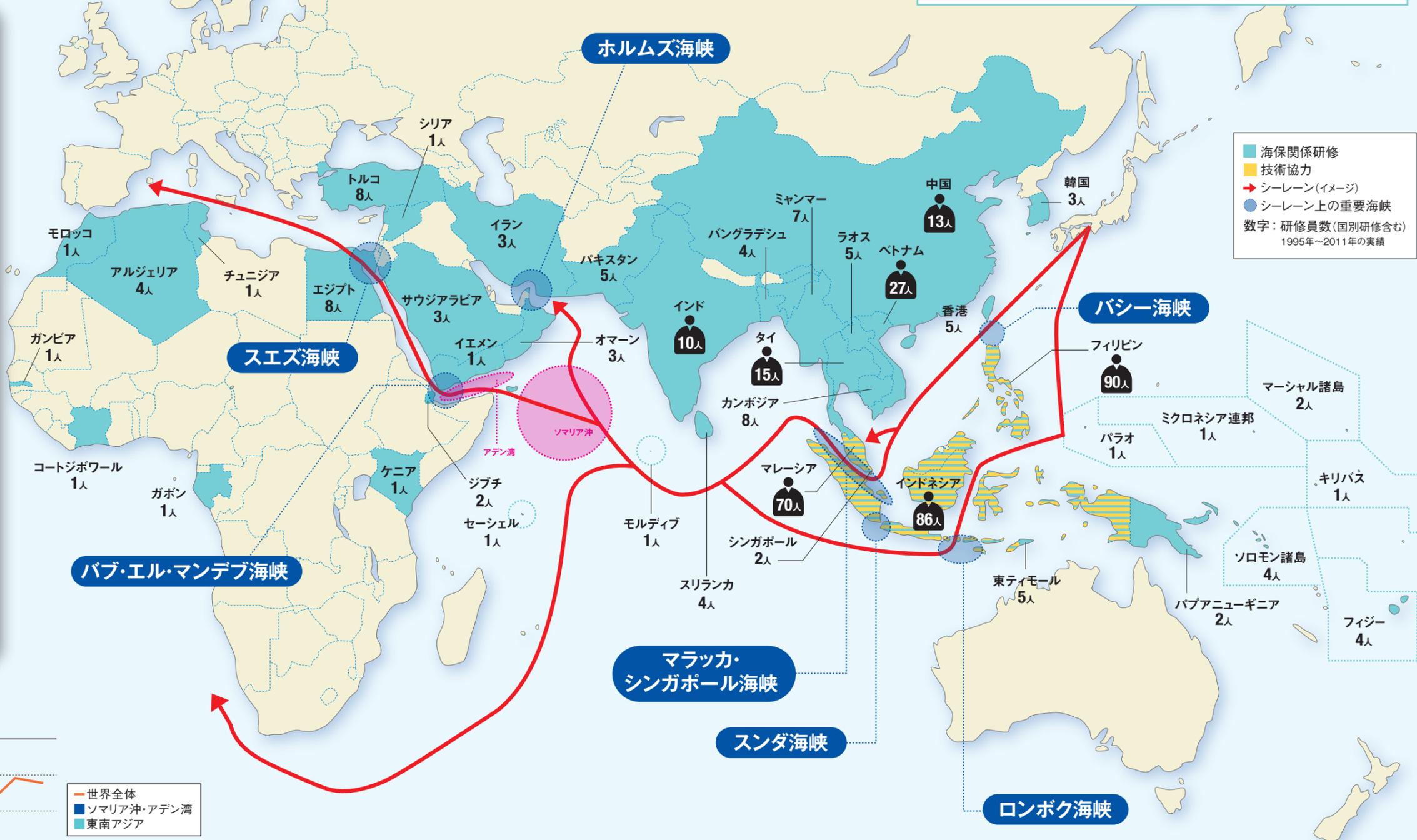


出典：IMB年次報告

為が発生する根本の原因は、途上国の貧困とガバナンスの弱さ。JICAはアジア、アフリカの開発を効果的に進めるためにも、これらの問題と併せて海上保安分野の協力を戦略的に進めていかなければなりません」とJICA経済基盤開発部の小泉幸弘課長。現在、無償資金協力と技術協力を組み合わせた支援を計画 중이다。

広大な海を相手にした取り組みは、一筋縄にいくものではない。しかし一つの組織の力、一人一人の「海猿」の思いが集まれば、いずれ大きな力となるはず。JICAは各国の海上保安組織とタッグを組み、世界の海を共に守っていく覚悟だ。

### 世界に広がる!? JICAの海上保安分野の支援



### 海上保安庁と連携したJICAの支援

JICAは海上保安庁との連携の下、これまで東南アジアを中心に、海上保安組織の能力強化、資機材の供与、人材育成などを展開してきた。その協力のポイントは4つ。海上犯罪の予防・鎮圧に向けた「法令執行」、海難事故からの救出のための「海難救助」、廃棄物投棄、船舶からの油などの流出事故を防止する「環境防災」、海上交通ルールや海図を整備する「海洋情報・航行安全」だ。「日本の海上保安技術は世界でもトップクラス。開発援助のプロであるJICAと連携することで、アジア全体の海上保安能力の底上げにもつながっています」と竹田教授は評価する。

近年は一国に対する支援に加え、東南アジア間の連携促進も強化している。

ソマリア沖・アデン湾の海賊行為に対しては、周辺国の海上保安官に対する日本での研修に加え、東アフリカ地域での支援を強化していく。「海賊行